

I 図画工作科 研究テーマ

表したいことをはっきりともち、「学びのものさし」を活用しながら表現を工夫していく子どもを育む学び

II 研究の重点

イメージや形、色などに着目した「見方・考え方」を働かせながら、表現や活動を工夫していく子どもを支えるための手立てを工夫する。

III 2年次の成果と課題

1 成果

(1) 物語性が表したいことをはっきりもつことにつながっていく

2年実践「シャボンでつくろう 海の物語」を具体例とし、成果を示す。シャボンが生み出す模様の偶発性にどっぷり浸る造形遊びから授業は展開された。子どもたちの興奮は「水の中みたい。」「海の中で遊んでいるみたい。」と一気に「見立てる」活動の入り口に立っていた。国語科で学習した「スイミー」を想起する子どもたちとは「海の物語」をテーマにすることを共通理解とし、自分なりの海の世界を表現して行って欲しいと願うがゆえの自由に表現する場を保障した。この自由に表現する場が却って行き詰まりを感じるようになった。そこで2つの手立てを講じたことが作品に愛着をもって制作する子どもの姿へと変容していった。

一つ目は、「すてきな海を見せてスイミーを元気にしよう」とテーマを絞ったことである。条件を付けたり焦点化したりすることが表現へのこだわりを濃くしていったのだ。「スイミーに兄弟を作って寂しくないようにしたよ。」「おにごっこで楽しんでいるスイミーだよ。」偶然できたシャボンの模様を仲間との楽しい空間に見立て、自分なりの海の世界を互いに語る子どもたちであった。

二つ目は、教師の語り掛けである。「見立てる」ことを核に据えた学習活動であることから、ついつい「○○みたいだね。」と制作の意図を共有したつもりの声掛けをしてしまいがちである。本実践で心掛けたのは「何をしているところなの?」「それはどんなところ?」と子どもの作品に描いた自分の物語について引き出す語り掛けであった。「ここにもっと部屋があるといいんだけど…」と話す子どもをきっかけに、今度は意図的に表現する追加シャボンの提案と活動は広がりを見せ「こう表現したい」というイメージを物語として語る子どもの明るい表情が印象的であった。

(2) 鑑賞の場が表現の試行錯誤を支える

子どもたちに提示した場面は白い部分の多い挿絵(スイミー)。白い部分があってもよいことを伝えるための鑑賞の場であった。そこで投げかけたのは「白い部分があるのとないのとではどう違うの?」という比較の目であった。「白い部分があった方がスイミーの寂しい気持ちが伝わってくる。」と話す子ども。空間の美しさとその効果を子どもたちは全体場で実感していったのである。すでに画面一杯に描いた子どもの悩みには、切り貼りする表現方法も提示され、自分の物語を創っていく過程で、表したいことに合わせて表現を試行錯誤する子どもたちの柔軟性が見られた。

2 課題 教師の語り掛けと鑑賞の場

こだわりの物語を抱きながら表現していく子どもたちを支える教師の語り掛けにバリエーションをもつこと。自己決定に刺激を与えることができる鑑賞の場を工夫すること。この2点を課題とし、試して、感じて、考えるというスパイラルの中で表現が紡がれていく子どもの見取りを大切にしたい授業構想を探っていきたい。